

Kansai Nikikai Opera

Oct.2022



関西二期会 第94回オペラ公演
『ドン・ジョヴァンニ』(2022年3月)
撮影:早川嘉雄

Contents

- 2.3 『リゴレット』作品解説
- 4.5 指揮者・演出家が語る『リゴレット』
- 6.7.8 オペラ歌手に聞く
大谷圭介 / 細川勝 / 周防彩子 / 松浦優 / 瀬田雅巳 / 根木滋
- 9 コンサートレビュー
関西二期会 第94回オペラ公演『ドン・ジョヴァンニ』
- 10 谷やんの企画・制作ディリーライフ
- 11 オペラ座の凡人 / 賛助会員
- 12 新人会員の紹介 / コンサートスケジュール



Rigoletto

リゴレット



異形の道化師の劇的なドラマ、
ヴェルディ会心の大傑作～《リゴレット》の魅力

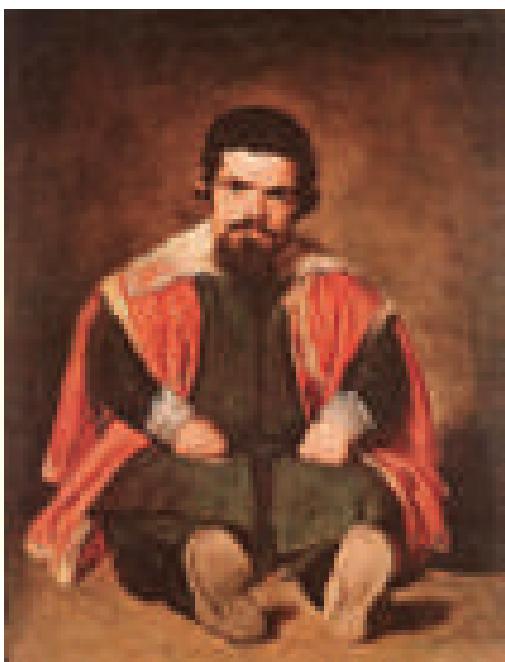
「宮廷道化師」を主人公にしたオペラ

17世紀スペインの画家ディエゴ・ベラスケスの代表作に、『ラス・メニーナス(＝「女官たち」の意)』がある。国王フェリペ4世の王女マルガリータの「宮廷」の構成員を描いた作品だ。侍女や養育係に混じって、ちょっと変わった人間も描き込まれている。右下にいる、女性の小人と少年の道化師だ

心身に障害を抱え、そのためまともな仕事につけず、それを見せ物に、宮廷の「慰み者」になる…小人や道化師は、中近世の宮廷生活に欠かせない存在だった。

ベラスケスは、宮廷道化師の肖像画を数多く遺した。『矮人(＝小人)セバティアン・デ・モーラの肖像』=写真下=『道化師ディエゴ・デ・アセド』…彼が描く道化師は意志や感情を感じさせ、とても人間的だ。

ジュゼッペ・ヴェルディ(1813-1901)の《リゴレット》

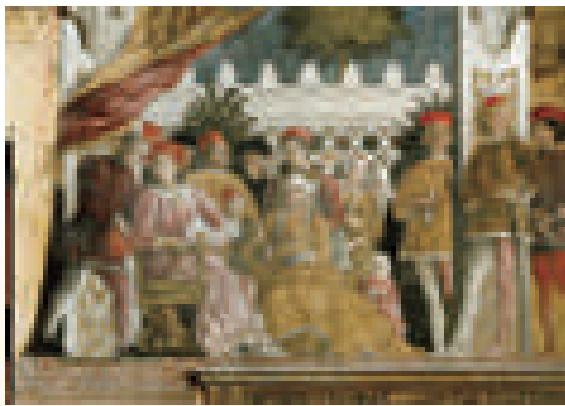


(1851年初演)は、この「宮廷道化師」を主人公にしたオペラである。醜い体のため宮廷道化師になり、嘲笑され見下され、君主を喜ばせるために毒舌を吐き、ますます嫌われる道化師リゴレット。彼は醜い体が強いる自分の業に苦しみ、宮廷人を憎んでいるが、一人娘のジルダの前では道化師の仮面を脱いで一人の人間になり、父になる…。ヴェルディは、愛と憎しみの間で張り裂けんばかりになっているそんな道化師リゴレットを、情熱的かつ劇的な音楽で描き切った。ベラスケスが鮮やかな絵筆で、意志のある道化師を創造したように。

原作に描かれた人物に惹かれて

『リゴレット』の原作は、フランスの作家ヴィクトル・ユーゴーの戯曲『王様はお楽しみ』(1832年初演)である。主人公は、フランス国王フランソワ1世の宮廷に仕える道化師トリプレ。フランソワ1世もトリプレも実在の人物だ。フランソワ1世は、レオナルド・ダ・ヴィンチを保護するなど文化芸術に造詣が深かった一方、女好きの放蕩者として知られた。『王様はお楽しみ』では、トリプレがフランソワ1世やその宮廷の乱脈ぶりを激しく非難する。そのため初演は大騒ぎになり、上演が禁じられてしまった。歴史上の人物であっても、実在の君主の批判はタブーだったのだ。

ヴェルディはこのトリプレという人物に惹かれた。「シェイクスピアにも劣らない創造」とまで言っている。ヴェルディにとってシェイクスピアは敬愛してやまない作家であり、すべての戯曲をオペラ化したいと夢見たほどだった。『リゴレット』の創作と前後して、彼がシェイクスピアの『リア王』のオペラ化を考えていたことは注目に値する。『リゴレット』の幕切れで、娘のジルダはリゴレットの腕に抱かれて死んでゆくが、リア王も最愛の娘コーディリアを腕の中で死なせている。その影響は小さ



マントヴァの宮廷画家だったアンドレア・マンテーニャ作
「ルドヴィーコ・ゴンザーガの家族と宮廷」。
右から4人目に女の小人が描き込まれている。
ぐない。

『リゴレット』はヴェネツィアのフェニーチェ歌劇場が依頼した新作として書かれたが、当時はハプスブルク帝国に属していたヴェネツィアも検閲は厳しく、フランソワ1世やトリブレを舞台に出すことは禁じられた。ヴェルディ(と台本作者のピアーヴェ)は舞台を「16世紀のマントヴァ公国」に変え、フランソワ1世は架空の「マントヴァ公爵」に、トリブレは名前の綴りTribouletと、フランス語の「笑うvigoler」を組み合わせた「リゴレット」になった。マントヴァの公爵はゴンザーガ家だったが、フランソワ1世と同時代の公爵には放蕩者もいたし、ゴンザーガ一族には「くる病」の遺伝があり、しばしば背中が曲がる症状が現れたという。マントヴァが舞台になったことを偶然だとしている解説書も少なくないが、上のようなことを考えるとヴェルディは意図的にマントヴァを選んだように思われる。

父性愛という大きなテーマ

『リゴレット』は、続いて書かれた『イル・トロヴァトーレ』『椿姫』と並んで、ヴェルディの「中期三大傑作」と称される傑作だ。この3作はいずれも、道化師、ジプシー女、娼婦という社会からのはみ出し者を主人公にした点で共通する。同時にヴェルディらしい輝かしく情熱的な旋律に溢れ、物語も劇的で、音楽とドラマに巻き込まれる快感を味わえる。加えて『リゴレット』は、ヴェルディの好んだバリトンの主人公や、これもヴェルディ作品で繰り返される「父性愛」が大きなテーマになっており、3作中もっとも「ヴェルディらしい」作品だといえるだろう。ヴェルディ自身、自分の作品の中で『リゴレット』を一番評価していた。いわば作者の「一推し」の作品なのである。

物語は確かに切ない。道化師リゴレットは愛娘のジルダを主君の公爵に犯され、復讐のために公爵の暗殺を企てるが、なんとジルダが犠牲になってしまう。異形の道化師の愛と憎しみが招いた悲劇につきまとうのは、モンテローネ伯爵の「呪い」。グロテスクな面もあるが、愛や情熱や怒りといった感情は普遍的だ。そしてヴェルディの音楽の見事なことと言ったら! (リゴレットの四重唱)のような名曲名旋律も多いが、物語と音楽が一部の隙もなく連動していることは目を見張るばかりだ。とりわけ第2幕で歌われるリゴレットの名アリア〈悪魔め、鬼め〉以降は劇的緊張感が全く途切れず、一気呵成に突き進む。全曲に通底するのは「人間とは何か」というヴェルディの熱い叫びだ。

『リゴレット』は、ヴェルディの、いやイタリア・オペラの傑作中の傑作である。この機会にぜひ、名作の真髄を体験していただきたい。

(加藤浩子)

公演情報

『リゴレット』

<全3幕 イタリア語上演・字幕付>

指揮：鈴木 恵里奈
演出：太田 麻衣子
管弦楽：関西フィルハーモニー管弦楽団

公演日程：
2022年11月26日（土）16:00開演
2022年11月27日（日）14:00開演

公演会場：メイシアター 吹田市文化会館大ホール

| | | |
|-----------|------------|---------|
| 11/26（土） | 11/27（日） | |
| 大谷 圭介. | リゴレット | 細川 勝 |
| 周防 彩子 | ジルダ | 松浦 優 |
| 瀬田 雅巳 | マントヴァ公爵 | 根木 澄 |
| 萬田 一樹 | スパラフチーレ | 片桐 直樹 |
| 雑賀 美可 | マッダレーナ | 井上 美和 |
| 萩原 泰介 | モンテローネ伯爵 | 山咲 韶 |
| 高岡 友美 | ジョヴァンナ | 岸畑 真由子 |
| 鳥山 浩詩 | マルッコ | 谷本 尚隆 |
| 藤田 大輔 | ボルサ | しまふく 羊太 |
| 近藤 修平（客演） | チェプラーノ伯爵 | 中野 嘉章 |
| 野々村 瞳 | チェプラーノ伯爵夫人 | 立塚 夢子 |
| 服部 英生 | 牢番 | 神田 行雄 |
| 味岡 真紀子 | 小姓 | 岡山 真理子 |

お問い合わせ

関西二期会チケットセンター 06-6360-4651

指揮者・演出家が語る『リゴレット』

ヴェルディの『リゴレット』。人間の奥底に澱む感情が交差する悲劇を、気鋭の指揮者・演出家のタッグで描く。指揮者の鈴木恵里奈氏と演出家の太田麻衣子氏に聞いた。

(インタビュー:吉村麻希)

指揮者 鈴木 恵里奈

関西二期会へは初のご登場となりますね

初回の音楽稽古はワクワクしつつも緊張気味で伺いましたが、歌手の皆さんととても温かい雰囲気で迎えて下さり、それでいて緊張感を持って一回一回の稽古に臨まれていて、公演がさらに楽しみになりました。

オペラ公演の面白さは、稽古で決まった約束事一つずつ実現していく事では生まれないと思います。その場でしかできないセッションを積み重ねる事で、言葉では語り尽くせない、神秘、もしくは宇宙とでも言える何かに近づけたかのような感覚になる幸せな瞬間が訪れることがあります。公演本番でその場の全ての表現者が自由に感じるまま音楽に没入できるようにするために、毎回の稽古でアンテナを研ぎ澄ませ、時に主張し、またある時は積極的にキャッチし、信頼関係を築いていけるリハーサルを積み重ねていける事を期待しています。

「リゴレット」はヴェルディ作品の奥深さが際立ち、また、人間の生き様を問われるような重い側面もあります。なぜ決して容易ではないこの作品がこんなにも聴衆を惹きつけるのでしょうか。

これまでで一番多く振らせていただいているのはプッチーニの作品です。言葉のアクセントやフレーズ感に基づいた、必然性のある自然な動きを持った音楽的フレーズを作る事や、オーケストラとソリストと共にどんな音色を作っていく事ができるかが、私目線での醍醐味だと考えています。

今回いよいよヴェルディの作品を指揮する機会をいただきました。「リゴレット」ももちろんイタリア語とは密接に関わり合っていますが、それに加えてリズムの要素も非常に重要になって来ると考えています。実際の舞曲としての躍動感あるリズムの他にも、リゴレットの娘への愛がにじみ出る柔らかく暖かい音色でのリズム、人間くささ全開の深い苦しみを表すリズム、復讐心がダイレクトに伝わる、まるで戦意を煽るようなリズム



ム、息絶えていくジルダのピチカートを伴ったリズム。挙げていくときりがありません。

また、三幕のリゴレット、ジルダ、マントヴァ公爵、マダレーナの4重唱では、4人の音楽がメロディーだけなくリズムまで、見事に書き分けられています。それらの中に意味のない音は一つもありません。全ての音が生きて、それがフレーズとなり曲となって人間の生き様を語っていける演奏となるよう、全力を尽くします。

鑑賞を心待ちにしているお客様へ メッセージをお願いいたします

マスクをして人と距離を取らなくてはいけない生活が長引いています。人ととの関わり合いが希薄になりますが、音楽と共に感じる人たちの間に距離はありません。公演にお越しいただく皆様と、人生をかけて音楽を追究している我々とが、音楽を通して密な時間を共有する中で心が触れ合える時間を持てることを楽しみにしております。劇場でお待ちしております!

鈴木恵里奈(すずき・えりな)

東京藝術大学指揮科、同修士課程修了。指揮を佐藤功太郎、ハンス＝マルティン・シュナイト、小田野宏之、セルジョ・オリーヴァの各氏に師事。副指揮者やプロンプターとして経験を積み、2019年に藤原歌劇団《蝶々夫人》で本格的オペラデビュー。以降、新国立劇場オペラ研修所《イオランタ》、藤原歌劇団《カルメン》《フィガロの結婚》《ラ・ボエーム》《蝶々夫人》、日生劇場《カプレーティとモンテッキ》などを指揮し、着実に活動の場を広げている。

演出家 太田 麻衣子

関西二期会には2019年 「フィガロの結婚」以来のご登場となります

明るく華やかなモーツアルト作品を、さらに楽しく面白くしていくという私の持ち味の出る演出手法で手掛けました。嬉しいことに、好評のお声をいただいたところで嬉しく思っています。今回の「リゴレット」は、その「フィガロの結婚」とは全く異なる重厚な内容の作品。私でいいのかしら、と戸惑いはありますが、再びご一緒できることを嬉しく思っています。

その重厚でいて、人間の深層にある暗い部分が露呈する作品をどう描くのでしょうか

テーマは“人生は仮面舞踏会のようなもの”。人は皆それ各自面をつけて、自分ではない誰かを演じている。そんなイメージを1幕冒頭パーティシーンで表しています。モノクロの檻の中で歌い踊る仮装の衣裳(今回は様々なオペラの衣裳をお借りする予定です)に身を包んだ人々…ここから物語が始まります。

そして最大のテーマとして、マントヴァ公爵夫人の存在があります。社会的・公的パートナーである夫人が、公爵と対等の価値を持つものとして存在する。その権威の象徴として「一対の肖像画の額縁」、また夫婦の象徴として「ダブルベッド」を舞台上に配置しました。そのシンメトリーな世界に対して常に様々な理由、例えばリゴレットのように身体的不自由であることや、親がいないこと、女であること等によりはじき出された者、虐げられた者が社会的弱者として存在するという現実があります。彼らに救いはあるのか……彼らの苦しみも嘆きも死さえも、誰の気に留まることもなく、ひそりと闇に葬られていきます。

その象徴となるのはジルダの死でしょうか

ジルダは確かに逃げ場のない世界に生きて社会と接触する機会がないゆえに世間を知りませんでしたし、リゴレットと同様に社会的にはアウトサイダーな人生です。一方で、その現状から逃れて生き未来をきり



広く機会が劇中にもあるわけです。けれども彼女はそうせず、3幕で死を選びます。それは必ずしもマントヴァ公爵を守る為だけではない、ヒロイズム的な彼女自身を救うための死です。彼女の存在と死は、浮き名の一つくらいにしか捉えていないマントヴァ公爵には知る由もないこと。一時の巷の噂話くらいにはなりますが、いつしか忘れ去られて社会的には何ら影響しない死。そのことがよりこの作品の悲劇たる所以かと思います。マントヴァ公爵が象徴する男社会においては、ジルダも、マッダレーナも、モンテローネ伯爵の娘も、マントヴァ公爵夫人でさえ社会的弱者なのです。今回女性歌手の皆さんにも助演としてご参加頂いてますが、彼女たちがどう動くかが大きなカギとなります。

お客様にメッセージを

劇場の中にいる時だけは日常を忘れるような時間だからこそ、哀しみの中から感じることや共感があり、何かを持って帰っていただけるのではと思います。本来オペラは遠い存在ではなく娯楽ですから。そのような共感の芽生えが、またオペラを観てみよう、劇場に足を運んでみようと次の鑑賞への興味とつながれば嬉しいです。

太田 麻衣子(おおた まいこ)

早稲田大学卒業後渡独。ニュールンベルグ市立歌劇場(現・州立歌劇場)・ゲルトナープラツツ州立劇場・バイエルン国立歌劇場、ウィーン国立歌劇場にて演出助手として研鑽を積み、「ミュンヘンオペラ祭振興会芸術祭賞」を受賞。その後バイエルン国立歌劇場と専属演出助手として契約し、全ての新制作作品や日本公演に参加。関西二期会とは、2019年「フィガロの結婚」以来の演出となる。

オペラ歌手に聞く

(インタビュー:四柳育子)

RIGOLETTO リゴレット



リゴレット役を演じる(26日)

大谷 圭介。

◆声楽家を志したのはいつですか。

大学在学中です。スタートが遅い私のような歌手も珍しいと思います。数学専攻の学生でしたが、在学中にオペラの先生との出会いがあり、声楽に目覚めました。その後、京都市立芸術大学大学院に進学しましたが、在学中は、一週間にこなさなければならぬ曲数がとにかく多くて、とても苦労しました。

◆リゴレットはどのような人物でしょうか。

職業選択の自由がない時代に、ハンデを背負った彼ができる仕事が宮廷道化でした。ジルダを社会から切り離して育てたのは、リゴレットのある種の“戦略”かもしれません。社会的弱者の父、しかも片親しかいない彼女が世間にいると、社会では迫害され続ける。リゴレットは

「リゴレット」はヴェルディの人生の投影
真摯に演じたい

ヴェルディにとって、彼自身の辛い心情や人生を投影したものだと感じています。

◆演出家の太田麻衣子さんとは3年前の『フィガロの結婚』以来ですか?

今回の公演では指揮者も演出家も女性で、このようないい題材のオペラを女性のお二方で扱うのは関西二期会にとっても初の試みです。鈴木さんは端正な音楽創り、太田さんは気さくにお話の出来る、でも芯のしっかりとした演出家で、どの様なオペラに仕上がるのか、とても楽しみです。

◆ヴェルディにとってオペラ「リゴレット」とは?

ヴェルディはユーゴーの戯曲「王は楽しむ」を読み、重いテーマのこの作品をぜひオペラにと、強く思いました。ヴェルディの想いのこもった力のある作品です。彼は、実生活では子供を二人亡くしたり、2番目の妻が迫害される姿を見ています。この作品で自身の現状の描きたかったのかもしれません。



リゴレット役を演じる(27日)

細川 勝

◆コロナ禍の中、どのようにお過ごしでしたか。

関西二期会でもしばらく公演が無い時期が続きました。私自身もここまで長い間、本番が無いのは初めてでした。実は久しぶりに稽古を始めた時、声が思うように出なくて驚きました。これからリゴレットを演じるにあたり、彼の難しい心情を心底演じるよう、楽譜を読み込み、説得力のある役作りを目指します。

◆演じる楽しみはどのようなところにありますか。

バリトンという声の性質上、実は悪役を演じるが多いです。俳優と同じ演じる立場として、例えば悪役のような、自分にはないものを演じることは一種の快感です。オペラ歌手ですので音楽を感じ、それに合わせキャラ

お客様が共感できる、
説得力のある役作りを

ラクターの感情を、自分なりに役に落とし込んでいく。こういった作業がとても面白いです。

◆「リゴレット」はどのような人物でしょうか。

一人娘を大切にするあまり、自身を破滅の道に追いかけてしまいます。娘への愛情は、私も実生活では父親なので共感出来ます。一方で「行動が浅はかで、考え方があまりないのではないか」と軽率に思う部分もあります。復讐を試み、それが自身に返ってくる点も、彼の愚かさではないでしょうか。

◆歌劇「リゴレット」の面白さを教えて下さい。

オペラの醍醐味を味わえる「This is the opera」と言える作品です。躍動感があり、わくわく出来る名曲ばかり。そして、その中に親子愛や人間ドラマがある。戯曲としての筋書きは完璧ではないかもしれません、音楽が人物の感情を伝え、物語に説得力を与える。この作品には「オペラの不思議」が沢山詰まっています。

GILDA ジルダ



ジルダ役を演じる(26日)

周防 彩子

◆2年ぶりの「ジルダ」ですね。環境の変化はありましたか。

娘を出産し母親になりましたので、リゴレットがジルダを守りたいという気持ちが痛いほど分かれます。反面、親の庇護から離れたいという思春期のジルダの想いも分かります。2年前と比べ、よりジルダの育ちや環境について考えるようになりました。

◆ジルダはどんな女性でしょうか。

一言では純真無垢。父親の愛を一身に受け、教会に行く以外は外出を禁じられている。言葉は悪いですが、殆ど軟禁状態で育っています。男性は父親しか知らないし、外の世界も知らない。思春期の自然な欲求として、ジルダは自分が何者かを知りたいのですが、父は多くを

**ジルダが生きる世界を、
深く考えて演じたい**

語らない。彼女は自分の世界を広げたいのです。

◆ジルダはマントヴァ公爵の、どこに惹かれたのでしょうか。

彼女は終始「アンジェロ(天使)」と歌います。彼女にとって見たことのない母親が天使のそばにいるわけで、彼女にとって天使は特別な存在。公爵はそれを、愛の二重奏のなかで、一番美しい音で歌い上げます。そこで彼女は気持ちをぐっと掴まれた。彼は心の要所を押さえる男性だと思います。

◆オペラ「リゴレット」の面白さとは。

登場人物が必死に生きている点です。ジルダは本当の自分を知りたい。リゴレットは道化として笑われながら、一方で娘を切実に守っている。公爵は太鼓持ちに囲まれる環境に疲れ、女遊びに走ったのかもしれません。ここには悪人がいません。ボタンの掛け違いで生まれた、人間のドラマが描かれています。



ジルダ役を演じる(27日)

松浦 優

◆役を貰った時のお気持ちはいかがでしたか。

オーディションを受け、希望の役を頂けた大きな喜びと、同時に不安を感じました。私は理想が高いからなのかもしれません、いつも「大丈夫かな」と自分自身を心配に思う一面があります。この度、ジルダ役という大きな役を任されたので、そんな自分を乗り超える機会に出来ればと思っています。

◆なぜジルダを演じるにあたり、不安を感じましたか。

実際の自分よりも置かれる状況や環境が大きく違い、年齢も若い役だからかもしれません。私は稽古中、落着いた声を出す傾向があります。ですので、今回は息や声を弾ませて歌い、演じようと考えています。リハーサルを

**お客様に見ていただきたい
芯が強く、人間味のある「ジルダ」**

重ね、演出家の太田麻衣子さんと相談し、ジルダのイメージを膨らませていきたいです。

◆ジルダとはどのような女性でしょうか。

清純ですが、若さゆえの衝動性があります。十代後半の思春期にあり、親への反発心も持ち合わせている女性です。彼女は自信に溢れる魅力的なマントヴァ公爵と恋に落ちますが、実際には恋に恋しているような状態。ですが、物語が進むにつれ、段々人間味が表れてきます。今回は清純なだけではない、芯が強く躍動的なジルダをお見せできればと思います。

◆演じる側として、オペラの楽しみとは何でしょうか。

一緒に演じる出演者や演出家と協議を重ねながら、役作りを進める事はとても面白いです。そして言葉で表現するのは難しいのですが、本番中に演じる役と自分の感情がピタリと一致することがあります。舞台上で自分ではなく、“役と一体化する”、そんな感覚になることがあります。その瞬間が楽しくて仕方ないです。

IL DUCA DI MANTOVA マントヴァ公爵



マントヴァ公爵役を演じる(26日)

瀬田 雅巳

◆オペラ歌手になろうと思ったきっかけは何でしょうか。

関西二期会に入った後、千代崎元昭先生との出会いがあったからです。それまでも個人レッスンを重ねていましたが、千代崎先生にオペラをきっかけで教えて頂きました。私は音大出身ではなく、異色の経歴かもしれません。

◆ヴェルディは登場人物にどのような思いを込めたでしょうか。

「復讐心」をリゴレット、「幼気、純粋さ」をジルダに込め、それらを誇張しています。物語を引立てるために、マントヴァ公爵は女好きの人物として、酷ければ酷いほど良い。困難が伴わない人物がそのまま人生を送るこの

階級社会がもたらした、 公爵の人物像を探る

設定を、良いとは言いにくいですが、初演された当時の階級社会では、これが普通だったのかもしれません。

◆マントヴァ公爵はどのような役柄でしょうか。

演出家との稽古の中でイメージが変わるかもしれません、20歳前半で最高位の貴族です。物語は彼の周りで進み、彼自身は重要な決断を迫られない。自分の身代わりで亡くなるジルダの悲劇的なエピソードにしても、恐らく彼は知らないでしょう。ラッキーな人物ですが、一方で軽く掴みどころや感情が無く、取り組みにくい役でもあります。

◆もし物語に続編があるとしたら、どのようになるでしょうか。

リゴレットはマントヴァ公爵に復讐すればよいと思います。もしくは、実はジルダは一命をとりとめていた、というのはどうでしょう。いずれにしても、マントヴァ公爵は、変わらずに生活を送っているのではないでしょうか。彼には酷いことをやっている、という自覚が無いわけですから。



マントヴァ公爵役を演じる(27日)

根木 滋

◆工学博士の一面もお持ちですか。オペラと科学の共通点はありますか。

薬学部准教授として未来の薬剤師を養成していますが、オペラも薬剤師も、相手を瞬時にわかる能力、共感力が大切。私の中で両者に大きな垣根はありません。科学と音楽に係る環境にいますので、私ならではの視点があると思います。それが他者と相互作用し、新しい創造を生み出せれば嬉しいです。

◆マントヴァ公爵をどのような人物とみられますか。

自分からは遠いタイプです。カメレオンの様に状況に合わせて人物像を変え、終わればリセットし後悔はない。一種の多重人格のようです。本心か、仮面をつけているの

オペラと科学 その魅力を論証する

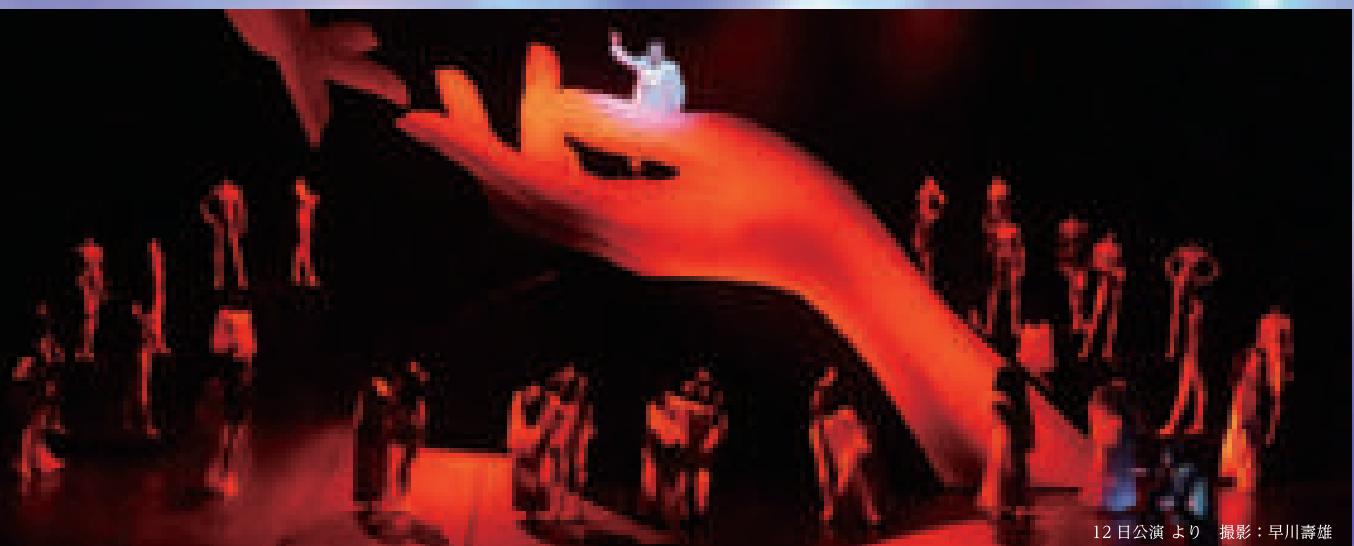
か、演じる自分に酔っているのか……。いずれにせよ、ジルダにとっては軟禁状態の現状から至福の喜びを味わわせてくれる、魅力的な存在でしょう。

◆オペラの魅力とは何でしょうか。

私はどんな作品であれ、オペラは祝祭的であるべきだと思います。上演されるその時々の最新の芸術と技術が融合する総合芸術の結晶で、集大成です。多様なリズム、音楽、美術、作品内の時間の流れが複雑に絡まり合う、最先端の芸術です。そこに身を置けるのは、人生においてかけがえのない事です。

◆「リゴレット」が時を経ても愛される理由とは何でしょうか。

まず音楽が魅力的です。そして様々な愛の形が多面的、立体的に散りばめられている。時代、民族をはるかに超えた普遍性があります。個人が共感できる要素が随所に盛り込まれ、多様的な感じ方を寛容できるオペラです。そう思うと、ヴェルディはとても先駆的な作曲家だったのでしょう。



12日公演より 撮影：早川壽雄

観客に様々なイマジネーションを
喚起させることに成功した演出

関西二期会 第94回オペラ公演「ドン・ジョヴァンニ」

コロナ禍で長らく延期となっていた第94回オペラ公演「ドン・ジョヴァンニ」の舞台が、約1年半の時を経て実現した。

まず目を見張ったのは、舞台上に置かれた数々の頭部のない女性のマネキン——これは世に名立たるプレイヤーのドン・ジョヴァンニにかつて愛され、心を奪われた女性たちの象徴だろう。片や、舞台上に度々姿をあらわした巨大な手のオブジェ。それは女性を巧みに誘うドン・ジョヴァンニの手のようであり、さらには釈迦如来の印相(降魔印[悪魔退散])や与願印[慈悲救済])のようにも見えてくる。特に、与願印のような手の型の上でドン・ジョヴァンニが奔放に歌う姿は、釈迦の手の平から出られなかった驕れる孫悟空の寓話を思い起こさせるほど。高岸未朝による演出は、何ともユニークだ。高岸が〈手〉という要素に重要性を置き、それを舞台装置として大胆かつ創造的に具現化させた本公演。「仏の心凡夫知らず」の如きドン・ジョヴァンニの地獄落ちに至るまで、観客の心に様々なイマジネーションを喚起させることに成功した演出だったといえよう。



13日公演より 撮影：早川壽雄

歌手陣では、軽妙さで魅せた従者レポレッロ役の山咲響と絶妙なコンビネーションを見せたドン・ジョヴァンニ役の萩原寛明がいなせにしてピカレスク。数多の女性を魅了するに相応しい歌いっぷりだ。このドン・ジョヴァンニを巡る女性たち——父を殺されたドンナ・アンナ役の木澤佐江子の歌唱はオペラの進行と共に求心的な深化を見せ、ドン・ジョヴァンニにかつて愛されたドンナ・エルヴィーラ役の森川華世は、傷心の深みや愛憎半ばの人間味溢れる演唱を展開した。そして村娘ツェルリーナ役の岩本実奈子の何と色香に満ちたコケティッシュさ。そのツェルリーナに翻弄されるマゼット役の谷本尚隆や、ドンナ・アンナに一途

な心を寄せるドン・オッターヴィオ役の秋本靖仁らが、巧みに脇を固めた。

気鋭の指揮者・小林資典のもと、関西二期会合唱団は充実したアンサンブルで要所を決め、大阪交響楽団は多彩な音色や振幅の激しい表現によってコミカルさとシリアルスさを兼ね備えたこのオペラの音楽的特質に見事に肉薄した。

(3月13日所見：村田英也)

2022年3月12日(土)、13日(日)

兵庫県立芸術文化センター
KOBELCO 大ホール

指揮者：小林資典
演出：高岸未朝
管弦楽：大阪交響楽団

谷 ゃんの 企画・制作 デイリーライフ

⑯ お菓子屋さんの音楽祭

関西二期会の財源の一つは、地元企業による賛助だ。HPには38の組織(学校法人含む)の名が並ぶ。筆者がかつて在籍した、梅田のあいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールも、保険会社が設置・運営するメセナ(企業の芸術文化支援)施設。そこでの実践が、音楽マネジメントや文化政策に関する教育研究の核となったが、感覚レベルの原点は30年以上前、北海道で携わった或る音楽祭に遡る。

帯広。札幌市と道東の拠点・釧路市の中ほどにあり、「日本の穀倉」といわれる十勝平野の中核だ。筆者は大学2年の夏、この町近くの農家でアルバイトしたのを機に北海道に渡り、新聞社に就職した。振り出しの地は奇遇にも、この帯広だった。人口約18万人。郊外は見渡す限りの小麦やビートの畑や牧場と、地平線へ延びる農道。カシワの防風林やサイロがランドマークの、大陸的な田園だった。



帯広ひろびろ音楽祭のパンフレット。地域の画家の作品をあしらっていた。右上は、2015年に六花亭が開いた「ふきのとうホール」のオープニング公演を収録したCD

この町で室内楽を軸とする、その名も「帯広ひろびろ音楽祭」が始まったのは1987年夏。地元の建築会社や衣料品店の経営者、医師ら共々実行委員会メンバーになった。スポンサーが「六花亭」だった。

ホワイトチョコレートやバターサンドといった、素朴かつ垢抜けた製品で今や全国に知られる菓子メーカー。自社の喫茶スペースでの公演などを既に手掛けていたが、副社長の小田豊さん(のち社長)が地域に音楽文化をもたらすべく、住民も運営参加する音楽祭つくりを呼び掛けた。慶



應大卒業後、京都の老舗で3年間修業し、家業を継いだ2代目。世界を飛び回っていた。取材で常々、聞いた言葉は「お菓子を取り巻く時間をつくる」。

出演者は新日本フィルコンサートマスターの豊嶋泰嗣さん、パリのエコールノルマル講師のフルート工藤重典さん、同じくフランス音楽の名手ピアノ藤井一興さんら。今では大御所の演奏家ばかり。札響やN響の楽員も併せ、1週間ほど滞在し、同社帯広本店の喫茶室やホテル、庭園や文化施設等で公演を重ね、多くが満員の盛況ぶりだった。

運営は初年度こそ、在京の広告代理店に助力を請うたが、翌年からは同社スタッフや実行委員会ら市民で自賄い。数カ月前から広報や券売を始め、会期中はお揃いのTシャツ姿で司会やステマネとして走り回った。

名演もさることながら、育ち盛りの筆者には、打ち上げで振る舞われたサケのちゃんちゃん焼きやタラバガニ、地元ワイン、主客一体の語らいが楽しみ。音楽祭を通じ、出身地も世代も業種も超えた一人の市民として、地域の祭りに参画出来た充実感と喜びが今に至る源となった。

この音楽祭はその後も継続された。が、聴衆が広がらず、マンネリを良しとしない小田さんの方針で、地域の文化育成組織に引き継がれた。ただ六花亭は室内楽振興支援を続け、2015年開設のJR札幌駅前本店に室内楽専用「ふきのとうホール」(客席221)もつくった。神戸市室内管弦楽団音楽監督だった岡山潔さん(ヴァオリン 故人)を初代音楽監督に、内外の名手を招いた公演を手掛け、コロナ禍も経た今日も健在だ。

芸術文化組織は往々にして、賛助者を純粋に「資金提供者」として見がちかもしれない。自社のステータス向上の思いもあるだろう。でも企業家の目線は時に地域づくり、人づくり、町の賑わいづくりにも及ぶ。つまりメセナは社会資本形成に向けた社会的投資でもあり得る。音楽組織経営側にも、広々とした視野が求められる。音楽を愛しその効用も知り、人々を繋ぎ若者を育てるプロジェクト、「音楽を取り巻く時間つくり」を必ずや関西の仲間と手掛けたい。

(谷本 裕 沖縄県立芸術大学教授、関西二期会顧問)

オペラ座の 凡人

～平凡人の歌劇な隨想

その 45 「素っぷん・素直に・素っけなく」

私鉄郊外線のお昼前。どの車両も過半数が空席。時間がおっとり流れている。

読みかけの文庫本を取り出し数行を読むうち、たちまち夢見心地に船を漕ぎだす。どこか意識の片隅で線香花火ほどな火花が散る。少し離れた席に女学生が数人。試験期間なのか、お昼前に早々と帰宅らしい。ここが火花の発信源。言葉の断片が火花に聴こえる。「あたし、スになったわ」「スが出てしまう」「あの子、スはいいんよ」等々。こちらは、いきなり大量の「ス」を浴びて、酢の物になつた気分で考えた。彼女たちに流行している「ス」は「素」のことらしい。「スになった」は「素の私に還った」等々。「素が出る」は本来、素でなく地と書き「地が出る」。職業柄や、舞台での役柄を忘れ、思わず私生活の自分や、あるいは役者本人が出てしまうこと。「素はいいんよ」はもちろん「素顔のあの子は良い子だ」

の意。「何語でも、言葉の流行の先端には、必ずその国の女学生が居る」という金言を思い出した。ここから流行語が生まれるのか?

そうして、素に戻る話で思い出すこと2篇。常田富士男さんは黒澤映画の名優にして、あの「まんが日本昔ばなし」の飄々とした語りと台詞が稀少な、役者らしい役者さんだった。ご縁があって私は20年近く、常田さんに多くの舞台やテレビ、CDなどの、脚本や台本を執筆してきた。決して器用でないけれど、ひたむきに練り上げてゆく至芸には、いつも客席から心のこもった拍手が届いた。

大阪のオーケストラで「作曲家が自分で語る作品と人生」(役者の独り舞台とオケ演奏)という連作コンサート・シリーズを書いていた頃、常田さんにはドヴォルザークの役でご登場頂いた。常田さんの懐かしさが滲み出る芸風は、故郷の自然が大好きだったドヴォルザーク役にピタリと合った。こういうときが台本書き冥利に尽きる時間だ。思わず涙ぐんでいたら、舞台の常田さんが絶句した。台詞が飛んでしまったのだ。空白の5秒、10秒…ザ・シンフォニーホールの舞台と客席が凍りついた。独白の舞台だから相手の役者はいない。だから何でも構わない。即興で通過すればよいのだ。しかし常田さんに、そんな器用な真似は出来ない。

果てしない絶句と沈黙のあと、常田さんは役柄から「素に戻って」呟いたものだ。「ドヴォルザークは…むずかしい…」。この時の客席の反応は凄まじかった。「ドオッ」と会場がどよめき、続いて歓声と拍手が弾けた。人柄の芸と言うべきか。

もうひとつ、これはDVDで秀逸な「素に戻る」光景。演目は歌劇王ヴェルディの異色作《リゴレット》。あのレオ・ヌッチが、題名役のリゴレットを当たり役にして務めている。他も粒ぞろいだが、何と云っても殿さん。あの能天氣とバカ殿を絵に描いたような、憎めないワル役に扮するは、収録当時まだ若手のアキレス・マチャート。南米生まれ。風采は挙がらないが愛嬌がある。ここ一番の聴かせどころ「女心の歌」を痛快に歌い上げる。会場は、やんやの大喝采が止まらないどころか大きくなっている。このときのマチャートの嬉しさ満面、こぼれる得意気、腕白少年のままの表情(!)。オペラの役は忘れ、完全に一人の歌手の「素に戻って」いる。彼は客席に向かって、「もう一度、聴きたいだろ?」と、人差し指を1の形に立てる。「イエーッ!」会場中が大騒動になり、オケが前奏を奏で、再び「女心の歌」が始まる。これでこそショウ・ストッパー。あなたが、もし、まだ観てないなら、これは是非ものだ。

(作家・音楽評論家：響 敏也)

公益社団法人関西二期会賛助会 入会のお願い

関西二期会は、オペラを中心とした音楽活動及び真摯な芸術活動を通じ、社会に夢や潤いを与え続けます。関西二期会の活動にご賛同いただける皆様に、法人・個人を問わず、何卒賛助会員としてご入会下さいますようお願い申し上げます。

賛助会員ご芳名

特別会員：上野製薬株式会社

| | | | |
|--------------------|-------------------|---------------------|-----------------|
| あいおいニッセイ同和損害保険株式会社 | 京セラ株式会社 | 住友電気工業株式会社 | 阪急電鉄株式会社 |
| 株式会社淺沼組 | 倉敷紡績株式会社 | ダイキン工業株式会社 | 富士有限会社 |
| 荒川化学工業株式会社 | 鴻池運輸株式会社 | 大日本除虫菊株式会社 | 株式会社丸善 |
| 稻畑産業株式会社 | 学校法人神戸女学院 | タカラベルモント株式会社 | ミズノ株式会社 |
| 株式会社エフエム大阪 | コーナン建設株式会社 | 株式会社竹中工務店 | 株式会社美々卵 |
| 株式会社大阪共立 | サラヤ株式会社 | 株式会社テクノープル | 学校法人武庫川女子大学音楽学部 |
| 大阪シティ信用金庫 | サントリーホールディングス株式会社 | 東京衣裳株式会社 | 森下仁丹株式会社 |
| 学校法人大阪成蹊学園 | 三宝電機株式会社 | 医療法人二村耳鼻咽喉科ボイスクリニック | 株式会社モリタ |
| 公益財団法人才リックス宮内財團 | 株式会社滋慶 | 株式会社ハートス | ロイヤルステージ株式会社 |

(他、匿名1社)

我孫子 昌三
石塚 克哉
伊藤 熱
岩佐 益男
江崎 正道

遠藤 秀夫
門屋 淳子
藏田 由美子
小谷 公穂
小八木 規之

佐野 吉彦
佐守 友博
杉野 守彦
辰野 勇
田中 昭子

田中 義雄
藤堂 稔之
中村 雅夫
西田 俊夫
仁禮 直之

林 律
早嶋 茂
樋口 信治
藤友 俊雄
山口 真子

(令和4年10月末現在 敬称略)

新入会員の紹介

大上 晃史 *Akihito Oue* (テノール準会員)

大阪音楽大学音楽学部声楽科専攻卒業。在学中にホルンから声楽へ転科し、小畠谷哲男氏に師事。過去にボローニャ歌劇場フィルハーモニーなどと共に演。現在、リゴレット公演にてマントヴァ公爵のアンダーを務める。



遠藤 映理 *Erie Endo* (ソプラノ準会員)

相愛大学音楽学部声楽専攻卒業。ショパン音楽大学海外研修ディプロマ取得。ベガ新人演奏会入選。大阪国際音楽コンクールオペラコース、歌曲コース入選。秋山文代、泉貴子、斎藤言子に師事。現在、相愛大学大学院修士課程在学中。



儀間 明日花 *Asuka Gima* (ソプラノ準会員)

神戸女学院大学音楽学部音楽学科声楽専攻卒業。同大学院音楽研究科音楽芸術表現専攻修了。斎藤言子氏に師事。若手演奏家団体ハーモニーエクラ所属。加西市演奏会団体ムーシケー所属。宝塚演奏家連盟会員。



スケジュール 2022-2023

◆2022年10月現在

(主催公演、当会が後援する公演)

10 October

4日(火) 18:30

Chantefleurs ~花をうたう

豊中市立文化芸術センター 小ホール

出演：岸畑真由子 / 松井るみ

14日(金) 19:00

第31回イタリア歌曲の流れ～イタリアの風景Vol.5躍動～

兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院小ホール

出演：大坂まり絵 / 岡山真理子 / 小倉篤子 / 小澤聖子 / 荻田夏子 / 桐山由香 / 鈴木さやか
高木華奈 / 中川令子 / 村上彩子 / 吉武貴子 / 千代崎元昭 / 西口浩二 / 山本欽也
公演監督：斎藤言子

16日(日) 15:00

乃村八千代 ソプラノリサイタル ～愛にふれる～

青山音楽記念館 パロックザール

出演：乃村八千代

29日(土) 13:30

ぱりとん亭千秋喜寿リサイタル

兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院大学小ホール

出演：田村仁美 / ぱりとん亭千秋

11 November

21日(月) 13:30

ぱりとん亭千秋喜寿リサイタル

くらやアートホール

出演：田村仁美 / ぱりとん亭千秋

23日(水・祝) 14:00

武久竜也・高野良輔 リート・デュオ・リサイタル

ドルチェ・アーティストサロン大阪

出演：武久竜也

24日(木) 19:00

三井ツヤ子 メゾソプラノ リーダーイベント

京都府民ホール アルティ

出演：三井ツヤ子

25日(金) 14:00

田村かよ子&田村香絵子 ジョイント・リサイタル

伊丹アイフォニックホール メインホール

出演：田村かよ子 / 田村香絵子

26日(土) 16:00、27日(日) 14:00

第95回オペラ公演 歌劇『リゴレット』

メイシアター 吹田市文化会館大ホール

26日出演：大谷圭介 / 周防彩子 / 瀬田雅巳 / 萬田一樹 / 雜賀美可 / 萩原泰介

高岡友美 / 鳥山浩詩 / 藤田大輔 / 近藤修平 / 野々村瞳 / 服部英生

味岡真紀子

27日出演：細川勝 / 松浦優 / 根木滋 / 片桐直樹 / 井上美和 / 山咲響 / 岸畑真由子
谷本尚隆 / しまふく羊太 / 中野嘉章 / 立塚夢子 / 神田行雄 / 岡山真理子
公演監督：斎藤言子

12 December

11日(日) 14:00

藤美千代ソプラノリサイタル～受け継ぐ心、語る歌声 其の三～

青山音楽記念館 パロックザール

出演：藤美千代

25日(日) 14:00/18:00

祝祭のヘンデル躍動する聖と俗 クリスマスの紅白歌合戦

滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール小ホール

出演：乃村八千代/武久竜也

2023.2 February

25日(土) 16:00、26日(日) 14:00

第96回オペラ公演 歌劇『魔笛』

兵庫県立芸術文化センター阪急中ホール

25日出演：片桐直樹 / 米田哲二 / 秋本靖仁 / 金岡伶奈 / 萩原寛明 / 密山浩美
四方典子 / 泉貴子 / 田中智子 / 大垣加代子 / 藤田大輔 / 山本伸子

丸山紗佳 / 味岡真紀子 / 西垣俊朗 / 服部英生 / 西口佳宏 / 山咲響

26日出演：武久竜也 / 西尾岳史 / 角地正直 / 奥田敏子 / 小玉晃 / 三村浩美
松浦優 / 白石優子 / 西村薰 / 井上美和 / 八百川敏幸 / 井上結衣

矢代あすみ / 安井裕子 / 馬場清孝 / 萩原泰介 / 西口佳宏 / 嶋田優介

公演監督：小畠谷哲男

2023.3 March

20日(月) 19:00

周防彩子ソプラノ・リサイタル

兵庫県民会館 けんみんホール

出演：周防彩子

2023.8 August 10 October

一次審査8月11日(金・祝)・12日(土)・19日(土)・20日(日)

二次審査10月7日(土)・8日(日)

最終審査10月9日(月・祝)

日本トステイ歌曲コンクール 2023

秋篠音楽堂

東京オペラシティ リサイタルホール(8月11日、12日のみ)